

YAMAKADO NEWSLETTER

NO.84

2006/11/15

山門水源の森を次の
世代に引き継ぐ会

保全作業予想以上にはかどる



PHOTO BY ITO

密集したイヌツゲの刈り払い作業中の老人会の方々（06/10/31）

年々訪問者が増加していますが、本会の最大の課題は「生物多様性に富む森の保全」であり、今年も多くの方々のご協力で例年以上の成果をあげつつあります。10月31日には、昨年に引き続き「山門老人会」の方々多数が参加していただき北部湿原と南部湿原の間の灌木帯の刈り払いを実施していただきました。この作業に先立ち30日には、会員が灌木帯の中でも指標木（将来遷移がどのように進んだかが確認できるように）に印を付け残すための下準備も行いました。

周囲の山地の紅葉と刈り払いによって、明るくなった灌木帯を是非観察していただきたいと思います。刈り払いによって、これまで日射が届かなかった水路にも日差しが届くよう

になり、来春からは生物の活動も活発になることが予想されます。

8月以来継続実施している「四季の森」周辺の下草刈りもほぼ完了しました。ここでの成果は、数年来続いているミズナラの枯死の周辺から幼樹が見つかったことです。刈取りでこの幼樹にも日が当たるようになり、生育が促進されることを祈るばかりです。

「四季の森」周辺の草刈りがほぼ完了した後、北部湿原の周辺部の草刈りを始めまし



刈り払いで顔を出した水路（06/10/31）



水路のヒルムシロとササバモ（06/11/01）



顔を出したミズナラ（06/10/19）



北部湿原縁のササ刈り作業（06/11/12）

た。山地から張り出したササ群落が年々湿原に張り出したからです。このまま放置すると、湿原がササ原に、さらに灌木帯へと遷移を進めてしまいます。20年前の状況と比較すると、ササの湿原への張り出しは、2mほど進行しています。山裾までササを刈り進めると、山地との境界部には南部湿原に現存する凹地（滞水部分）が過去には存在した証拠が顔を出します。加えてササを刈り取った下部には、ミズゴケ等の腐食物質が堆積していると思われる弾力が認められます。



山門区民秋のハイキング (06/11/05)

10月中旬以降来訪者が急増してきました。様々な団体が、各種各様の目的をもって訪れています。この団体のガイドを務めていただく会員の方々も、相手に合わせたガイド・解説内容を工夫していただくのにご苦労頂いています。が一方で県外を含めて、いろいろな方々と一緒に、教わることも多く「勉強になる」との声はしきりです。

長年お世話になっている「山門区民」のみなさんが、今回初めて「区民ハイキング」を森で実施されました。地元とはいえ、「初めて来た」という方々も多く、「話をきいて、こんな凄い地域とは・・・」と感想しきりでした。案内は、本会会員が行いました。これで今後地域のみなさんの「山門水源の森」への思いも変わることだろうと予想されます。



年間頻度の高い朝日旅行の1班 (06/11/05)

旅行業者主催の観察会も頻度が増加しています。ガイド役を買って出ていただいた会員は、マンネリ化を防ぐため、様々な工夫をしています。「花」の解説には、「実」の画像を持参したり、



「獣道」を使ったガイド (06/11/05)

別のシーズンの風景を示しながら現況を解説したり等々。また新たに見つかったポイントを使っのガイド等です。



紅葉をバックに訪問者サービス (06/11/05)

た。記者とはいえ、自然のことには全く疎い面々が多く「イモリ」を手にして悲鳴をあげるという場面に接し、自然離れの現況を再確認する場面もありました。

「山門水源の森」の認知度が徐々に増すにつれて、いろいろな団体から講演・展示・事例報告依頼が続いています。「認知度」をあげることも必要なのですが、前述したように本体の「山門水源の森」の保全事業が十分になされてこそと思いつつ、こうした催しに参加しています。こうした催しに参加する度に、多くの会員にご無理をお願いして、他団体との協調を保っています。その間「森」での作業が止まるという現実との板挟みがあります。

その上に各種研究団体の現地調査にも協力をしてゆく必要性があり、人手はどれだけあっても



PHOTO BY CHIKANARI

マキノ高原での「屋台村」展示 (06/10/28・29)



記者案内風景 (06/10/27)



「むしの会」水生昆虫調査 (06/11/12)